

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52週移動平均との乖離で見ると、6月24日につけた99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待されます。

ただし、ドルの上値は徐々に重くなってきており、自立反発で戻っても103円の壁を上抜くことは難しいかもしれません。

■ 短期展望

先週は、週初からドル売り圧力が続き100円台へと押し込まれる展開となりました。

ドル/円相場のトレード戦略

週末の米雇用統計の改善を受けて一旦リスクオフは小休止となり週を越えていますが、ドルの戻りは鈍く、予想以上に円買い圧力が強いとの印象で、既に103円水準は上値抵抗となっています。

しかし、週末の参院選での自民党の大勝により、安倍首相の新たな経済対策に対する期待感が円買いポジションの調整を引き出し、ドルを下支えする要因となることで、目先100円割れの定着は免れそうです。したがって、当面、100円～103円程度のレンジでの神経質な取引継続がメインシナリオといえるでしょう。

ただし、ドル安・円高の大きな流れに変化はなく、100円割れが定着するような場合には、英国民投票直後の6月24日につけた99円ちょうどを下抜け、円高・ドル安の動きが加速するリスクは残っています。

この場合、95円が視野に入ってくる状況では、年初からの下落率が20%を超えてくるため、日銀による介入の可能性が高まることには留意してきたいところです。